◎『のすすめ ―― いのちのにあずかる』

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　趣意書＋引用・参照した資料

①一匹の蠅（はえ）でも、一本の草でも、**いのちの泉の恵みをまっすぐに享**（う）**け、「宇宙の宴**（うたげ）**にあずかる一人（いちにん）」**です。私たち人間一人一人も同様に、いのちの宴にあずかる一人（いちにん）です。

②　この泉から湧き出る水は窮まることがなく、私たちはその無限の恵みを現に享（う）けています。

上から照らしてくれる太陽も月も、下から湧き出る泉も、「私（わたくし）に偏ることなく」、善人も悪人も同様に、この恵みを給（たま）わっています。

③　「散乱している俗世間を離れ、静かな山に入って心を静かにしよう」と思うならば、その心自体が「あれこれ」そのものですから、たとえ静かな場所に入っても、心は散乱したままでしょう。逆に、「あれこれなし」、すなわち「入るべき山もなければ避けるべき世もない」と心が定まれば、どこにいても「真の宴」の真っ只中です。「あれこれなし」に宴にあずかる宴坐の道を、どの場にあっても歩んでいけます。

④　「煩悩を断って平安な心になろう」と思うならば、その心自体が「あれこれ」の中で平安を失っています。不断煩悩（ふだんぼんのう）のままに宴にあずかっていること、これが「宴坐」です。

⑤　ですが私たちは、自分の知見（人や自分の考えや基準など）で作った檻（おり）に自ら入り込み、いのちの恵みを自ら遮（さえぎ）ってしまっていることが多いのではないでしょうか。

⑥　これは自らの知見で自縛しているのですから、ちっぽけな知見や理解をすべて放ち捨てれば、本来の自在な自由人に立ち返ることができます。

⑦　私たちは、いのちの宴に現にあずかり、活溌溌地（かっぱつぱっち）に躍動する「大丈夫児」なのですから、誰でも持前を発揮するだけで、即座に宴坐の姿勢、すなわち腰の据わった正身端坐の姿勢となります。

⑧　それなのに、丈夫な気息（いき）をせず、「自分の頭はどこにあるのだ」と外に探し求めるような腰抜けの生き方のままでよいのでしょうか。

⑨　煩悩や迷いに満ちた今の自分のまま、「仏の御いのち」にあずかっています。ですが、生命（せいめい）を「わたくし」に費やすと、貴い御いのちを無駄にしてしまいがちです。「わたくし」に費やす生き方を翻（ひるがえ）し、自分を丸ごと仏に差し上げる姿が宴坐です。身をも心をも放ち忘れて宴坐することで、「仏の御いのち」に真にあずかる道を歩むことができます。

⑩　何かの条件（基準）をクリアしたら宴にあずかれるというのでなく、煩悩や欠点に満ちた今の自分のままで、いのちの宴にあずかっています。この宴にあずかっていることは、それ自体で「ひとりだち」していて、何かの補助手段にたよることは全くいりません。

⑪　このほかに、隠していることは何一つありませんし、ほかに教えることもありません。終日宴坐、これは無碍の一道で、どのような状況にあっても、何の妨げもありません。

⑫　恵み給わった御いのちに自分を丸ごと放ち忘れ、この宴にまっすぐにあずかり、わたくししない（不私）姿、生命をわたくしについやさない姿、これが宴坐です。

⑬　天地に全身を投げ出し、自分の足でただ起き上った姿、これが宴坐です。

不断煩悩そのままに宴の真っ只中にあること、これが宴坐です。

⑭　私たちは誰でも、いのちの宴にあずかる一人であり、行住坐臥、いつどこで何をしていても、この宴から除け者になることはなく、常に宴坐の姿勢で生きていけます。

⑮　この終日宴坐を自らつとめ、人にも勧めることをもって、私の天職、唯一無二の使命、わがいのちといたします。

◎趣旨を十の句にしてみました。

１．まっすぐに いのちのの みをけ　のに あずかる

２．りなき いのちのを ねれば　まりて まらず

３．もも よりらして せず　きるも せざるなし

４．（orあれこれなし）これをづけて とす　るなく けるもなし

５．ら して す　し にさせよ

６． のを なぜせざる　をもちて むとは

７．のいのちに をもをも ちれ　 つとむべきなり

８．を にせず わたくしに　ついやさざらんと するなり

９．わがいのち ただむ　ひとりだちして ささぬなり

10． の このほかに　かくすことなく えることなし

【引用・参照した資料を下に挙げます。】

◎１．まっすぐに いのちのの みをけ　のに あずかる

●この句の参照元：ドストエスフキー『白痴』第三巻。

・室生犀星の詩から（米川正夫訳からと思われる）

【1-1】「いをびてゐるの。**ですらのにる一人で、のゐるべきところをちやんとてゐる**。」

・米川正夫訳（岩波文庫『白痴（下）』、1994年改版、171頁以下）

［結核を患い、余命２週間と医者に言われているイッポリートという18歳の青年の告白文から］

【1-2】　ぼくのそばで日光を浴びて、うなっている微々たる**一匹の蠅すらも、この宴とコーラスの喜びにあずかるひとりとして、自分のいるべき場所を心得かつ愛して、幸福を感じているのに、ぼくひとりきりのけものである**――今はこういうことを分ごとに、いや秒ごとに切実に感じなければならぬ、いやでも無理無体に感じさせられる。今までは了見の狭いばかりに、このことを悟ろうとしなかったのである。…

【1-3】　ああ、もうたくさんだ。ぼくがこのへんまで読み進むとき、もうきっと陽が昇って、「**天に響きわたり**」、**偉大な量りしれない力**が宇宙にみなぎるだろう。それもよかろう！　ぼくは**この力と生命の源泉を直視しながら死ぬのだ**。生はほしくない！

・同じく米川正夫訳で旧岩波文庫版での文：

【1-4】「**この蠅すらも宇宙の宴に與かる一人で、自分のゐるべき場処をちゃんと心得てゐるのに、余一人きり除けものである**」

・同じ箇所の別の訳。望月哲男訳（『白痴（２）』、河出文庫、497頁以下）

【1-5】 「いまのぼくは一分ごと、一秒ごとに、否応なく思い知らされているんだ――たとえば日の光を浴びて周囲をぶんぶん飛び回っているこの小さなハエ、こんな奴でさえ世をあげての**饗宴と合唱の参加者**として、自分の持ち場をわきまえ、それを愛し、幸せを感じているのに、**ぼく一人だけが死産児**であり、ただ臆病なためにこれまでそのことを認めたがらなかっただけだということを！　…

【1-6】 そう、もうたくさんだ。この辺まで読む頃には、**きっともう日が昇って、「天上の音楽が奏でられ」壮大な、無窮の力が、世にあまねく流れだすことだろう**。よろしい！　**ぼくは力と生命の泉をまっすぐに見つめながら死んでいこう**、こんな命などぼくは欲しくない！」

◎２．りなき いのちのを ねれば　まりて まらず

●この句の参照元：

●西田幾多郎「無の自覚的限定」（1932年、『西田幾多郎全集第五巻』53頁）

【2-1】　絶対無の自覚の立場から云えば、自己の中に自己を見る自覚的限定というのは**絶対無限の流**ともいうべきであろう、**絶対の無より流れ出でて絶対の無に流れ去る無限の流**ともいうべきである、寒山子の所謂 **尋窮無限水 源窮水不窮**である。

●唐木順三「おそれといふ感情　―ある泉のほとりで思ったこと―」

『唐木順三全集第９巻』筑摩書房）には次のようにある。

【2-2】「私の好きな寒山詩の中の一句は次のようなものである。

**尋究無源水、源窮水不窮**（**無源水を尋究すれば、源窮まって水窮まらず**）」

●「寒山詩」の原文

【2-3】（書き下し文）きをすれば ってまらず

（原文）尋究無源水 源窮水不窮

◎３．もも よりらして せず　きるも せざるなし

◎４．（あれこれなし）これをづけて とす　るなく けるもなし

●この参照元は**聖徳太子［574 - 622］作の**

**伊予の温泉（道後温泉）の碑文（伊予湯岡碑文）**   
【3-1】　碑の現物は亡失し、文面のみ『釈日本紀』巻十四所引の『伊予風土記』逸文に残っています。『釈日本紀』や『万葉集註釈』が引用した「伊予風土記逸文」によると、推古４年（596年＝法興６年）聖徳太子（厩戸皇子）と思われる人物が伊予（現在の愛媛県）の道後温泉に高麗の僧・慧慈（えじ）と葛城臣（かつらぎのおみ）なる人物を伴って赴きました。その際、温泉の妙験に感嘆して、碑文を作ったとのことです。（その「碑」自体は現在失われています。）

【3-2】（碑文の書き下し文）

うにれ、**はにらして、せず。はにて、せざるし。**

にし、にかにく。

かの**らししてにすることき**は、ぞ、、にいてするにならんや。

（原文）　惟夫　**日月照於上　而不私　神井出於下　無不給**万機所以妙応　百姓所以潜扇

若乃**照給無偏私**何異干寿国　随華台而開合

・梅原猛著『新版 聖徳太子（上）』（小学館、1989年、435頁以下）の現代語訳から。  
【3-3】 「思うに、日月は上にあって、すべてのものを平等に照らして私事をしない。

神の温泉は下から出でて、誰にも公平に恩恵を与える。

【3-4】全ての政事（まつりごと）は、このように自然に適応して行われ、

すべての人民は、その自然に従って、ひそかに動いているのである。

かの太陽が、すべてのものを平等に照らして、偏ったところがないのは、

天寿国が蓮の台に従って、開いたり閉じたりするようなものである。

●維摩詰所説経（『維摩経』）　鳩摩羅什訳（大正大蔵経から）

【3-5】（書き下し文）をぜずして、にる、これをとす。

（原文）不断煩悩而入涅槃、是為宴坐。

●聖徳太子著『維摩経義疏』の「宴坐」の箇所の書き下し文

【3-6】 「、よ。ずしもするをとさなるなり」とは、それのをずれば、ずしものからずとなり。＝舎利弗はにたり。に**のをえて、にれ、てをめんとす**。るにのをすことは、し、**にして、せずとすれば、ぞをずるらん**。し**はなりとしてずることわざれば、にるともちぞれん**。…

【3-7】 「それとは、にて・をぜざる、をとす」とは、うこころは、**にし、るべきく、けるべきし、**ちをにてぜざる。 **をづけてとす**。

【3-8】　、**して、をてにる**、即ち、・をにてず。**あにくとづけん**。…

【3-9】 「**をぜずしてもにる、をとす**」とは、しく、**にして、ずべきし**とせば、これ**ちらをす**。は、**にじてのち、ににるとす。ちをす。ぞづけてとさん**。

◎５．ら して す　し にさせよ

【5-1】●この句は、百丈禅師の次の言葉から：

もしをって、をなさば、… これののなり。らをじて、す**。**

（原文）若守初知為解、…是一切塵労之根本。自生知見、無縄自縛。

**【訳】**もし、今もっている知識にとどまって、そこから理解しようとしているならば、それがすべての葛藤や思い煩いの根本である。

　自分の知見で、「無縄自縛」してしまっている。（縄で外から縛られているわけでないのに、自分で自分を縛っている。）

【5-2】**●**ただ、のにて、てなく、またにせざれば、ちこれ**。**

**【意訳】**ただ今、どのような環境や出来事の中にあっても、愛着することなく、また知識や理解に依りかかったり居着いたりしなければ、自由人だ。

◎６． のを なぜせざる　をもちて むとは

●この句の元は臨済禅師の言葉：

臨済禅師は、「大丈夫児」「大丈夫漢」と目の前の相手に繰り返し呼びかけている。

【6-1】●、まさにる、なることを。ただ、なるがに、して、をてて、をめ、らむことわず。…

**【意訳】**大丈夫な者よ。本来無事である（どういう事でもない）ことを、今まさに知るがよい。君は、ただその「信」が足りないから、頭がちゃんとあるのに、「私の頭はどこにあるんだ？」と外に探し回ってばかりいて、それを止めることができないでいる。…

【6-2】●**の、のをなさず**、のをえてぜず、に、にってめ、ののにり、にり、にって、することわず。にうては、ちじ、にうては、ちし、にいって、らなし。

**【意訳】**大丈夫な者よ。なぜ丈夫な気迫をもたず、丈夫な息をしないのだ。

　自分の家に元々あるもの（自分が本来もっているもの）を信じないで、そのように、外に向って求め、古人のつまらない言葉をあげつらってばかりいる。

内面ではそれに依存し、外面的にはそれで威張ったりしていて、ぜんぜんしっかりしていないではないか。

　どんな状況にあっても振り回され、何か物事に出会ってはそれに執着してしまい、（眼や耳に触れるものなど）何に触れても、自分で惑ってしまって、ぜんぜんしっかりしていないではないか。

【6-3】●、もし・・、ならんとせば、、をせよ。・・にして、なり。

**【意訳】**君が、生きるか死ぬか、行くか留まるか、脱ぐか着るかなど、あらゆるあれかこれかの問題の真っただ中で、自由であることを望むならば、今ここで、私の話を聴いている者（君自身）を知ってとれ。形相（かたち）もなく、根本もなく、どこかに居着くこともなく、活発に躍動しているではないか。

◎７．のいのちに をもをも ちれ　 つとむべきなり

◎８．を にせず わたくしに　ついやさざらんと するなり

●この句の元は道元禅師。

●『正法眼蔵』（岩波文庫）の「生死（しょうじ）」から：

【7-1】**このはすなわちのいのちなり。**

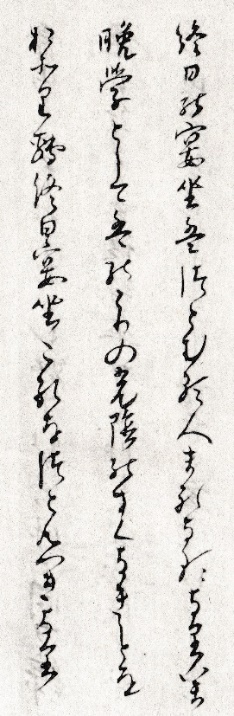
　これをいといすてんとすれば、すなわち仏の御いのちをうしなわんとするなり。これにとどまりてにすれば、これものいのちをうしなうなり、のありさまをとどむるなり。

【7-2】　いとうことなく、したうことなき、このときはじめてのこころにいる。ただし、をもてはかることなかれ、ことばをもていうことなかれ。

【7-3】**ただわがをもをもはなちわすれて、のいえになげいれて、のかたよりおこなわれて、これにしたがいもてゆくとき、ちからをもいれず、こころをもついやさずして、をはなれ、となる。**たれの人か、こころにとどこおるべき。

●『正法眼蔵』の「行持（ぎょうじ）下」から：

【7-4】道元禅師の直筆文が現存している。

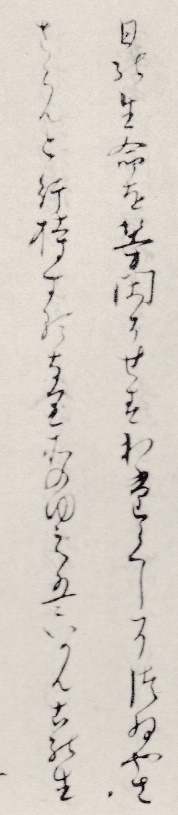


抽象, 挿絵, 線画 が含まれている画像

自動的に生成された説明

【7-5】はつとむるまれなるなり。いまとしては のこりののすくなきことをおそれて、これをつとむべきなり。

【7-6】●同じく、『正法眼蔵』の「行持（ぎょうじ）下」から：（直筆文現存）



【7-7】日日のをにせず わたくしに　ついやさざらんと するなり

◎９．わがいのち ただむ　ひとりだちして ささぬなり

●一遍上人の言葉：

●『一遍聖絵』（岩波文庫、53頁）

【9-1】［鎌倉に入ろうとして役人に留められた時の言葉］

「**法師にすべて要なし、只人に念仏をすすむるばかりなり。… 念仏勧進をわがいのちとす。しかるをかくのごとくいましめられば、いずれのところへかゆくべき。ここにて臨終すべし**」

●法然上人の言葉：

【9-2】 **本願の念仏には、ひとりだちをせさせて、すけをささぬなり。**すけというは、智恵をもすけにさし、持戒をもすけにさし、道心をもすけにさし、慈悲をもすけにさすなり。

【9-3】 善人は善人ながら念仏し、悪人は悪人ながら念仏して、ただうまれつきのままにて念仏する人を、念仏にすけささぬとはいうなり。

【9-4】 さりながら**悪をあらため、善人となりて念仏せん人は、仏の御心に叶うべし。かなわぬ物ゆえに**、とあらんかからんと思いて、決定心おこらぬ人は往生不定の人なるべし。

**【意訳】**

【9-5】 本願の念仏は、それ自体で「ひとりだち」しているのであり、他の何らかの補助手段（たすけ）はいりません。「智恵」「戒律を守る」「道心（仏道を志す菩提心を発す心）」「慈悲」、これらの補助手段も不用です。

【9-6】　善人は善人のまま念仏したらよく、悪人は悪人のまま念仏したらよく、ただその人のままで念仏する人を「念仏でひとりだちし、他に補助手段を頼んでいない人」といいます。

【9-7】　だが、世の多くの人はそこに心が定まらずに、「そうはいっても、悪をやめて、善人となった上で念仏する人のほうが、阿弥陀仏の御心に叶うにちがいなかろう。悪人のままだと、仏の御心に叶わないなぁ。『とあらん（あのようにあろう）』とか『かくあらん（このようにあろう）』などと、ああだこうだばかり思っていて、心が決定しない人は、往生も定まらないままです。」

◎10． の このほかに　かくすことなく えることなし

●親鸞聖人の言葉：

【10-1】『歎異抄』第七条：「念仏は無碍の一道なり」

●私が二十歳の時に読んだマンガ『親鸞さまの教え』から：



【10-2】「私は阿弥陀さまのおちかいを信じ念仏申すよりほかに　かくしたり　教えることもない。

【10-3】これが私の八十年のしょうがいをかけてえた　ただひとつの道じゃ」